

## アユの非感染性スレ症の遮光による発生防除

山本充孝

### 1. 研究目的

アユの非感染性スレ症は、主に琵琶湖産アユで見られる疾病であり、4月以降にヤナ等の河川およびその近辺で漁獲されたアユで頻発する。原因は他のアユからの噛みつきや体当たりなどの攻撃行動によるとされている。近年、冷水病の防除対策として実施されている加温処理は、アユの攻撃行動がより活発になる高密度・高水温下で行われるため、本症が発生すると重篤化しやすいことが問題となっている。本症はアユが他個体を認識できない飼育環境にすれば発生しないと考えられることから、遮光による発生防除の効果について検討した。

### 2. 研究方法

2010年4月または6月にヤナで漁獲された琵琶湖産アユをそれぞれ約1ヶ月間飼育して魚体重が約15gとなったアユを用いて2回の試験を実施した。25L容の不透明なコンテナ水槽に30尾ずつ収容し、無給餌で18℃の地下水を用いて14日間流水飼育した。光源は自然光とし、屋内の窓際に水槽を設置した。遮光はコンテナ水槽の上面を光透過率が異なる遮光幕で覆って行った。試験区として非遮光、透過率約30%の遮光ネットを1~3枚重ねた3段階、および不透明な遮光幕による完全遮光の計5段階(非遮光, 遮光1, 遮光2,

遮光3 および完全遮光)の光条件を設定して、各区2反復で本症の発生状況を調べた。照度は各水槽の水面に照度データロガーを設置して測定した。

### 3. 研究結果

各試験区における10~14時の平均照度(4月ヤナ・6月ヤナ)は非遮光から順に 932・840 lx、208・177 lx、40・55 lx、3.3・8.6 lx および 0・0 lxであった。本症による死亡率は、順に 68.3・66.1%、45.1・55.0%、5.0・12.2%、0.0・1.8% および 0.0・0.0%となり、照度が低いほど死亡率が低かった。このことから、照度を 5lx 程度にすればほぼ完全に防除できると考えられ、また、50lx 程度でも概ね本症の発生が抑制されると考えられた。アユが他個体を充分認識できると考えられる 50lx 程度でも死亡が大幅に軽減されたことから、低照度にすることでアユの攻撃行動が抑制されたため本症の発生を防除できたと考えられた。



図1 典型的なスレ症状を呈したアユ

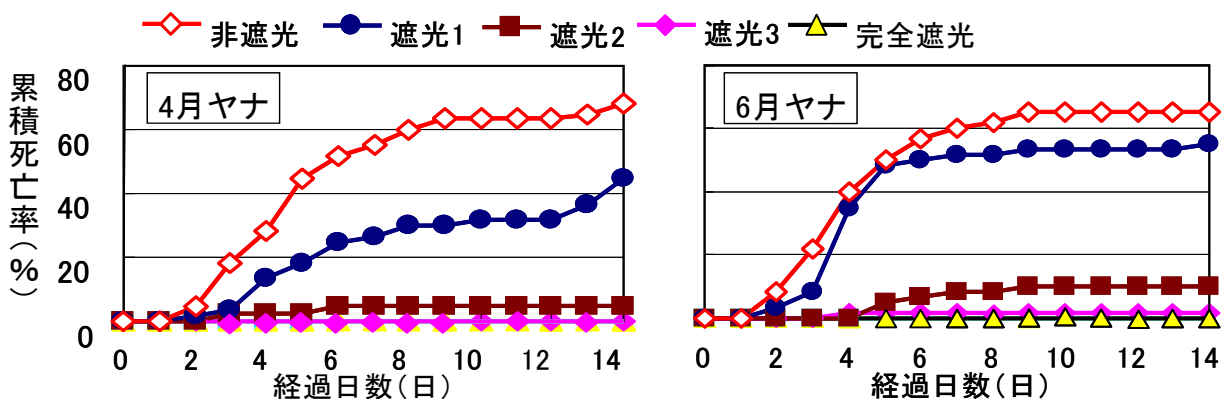


図2. 遮光による非感染性スレ症の防除結果